

ここに生ける川がある

丸山 勉

[聖書] ヨハネによる福音書 7 章 10～19、37～39 節

中心聖句——「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。『渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。』イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、“霊”がまだ降っていなかったからである。(7:37～39)

「イエスという人は一体どういう人なのだろう」。—その問いは、恐らくずっと続く問いであろう。今日の聖書箇所、ヨハネ 7 章では、ユダヤ人たちのイエスに対する捉え方が様々であることを描いている。私たちは誰かのことを聴く時、すでにそこに先入観が入ってしまっていることが多い。噂話、誰かからの口コミ、現代ならば TV とかネットニュースなどに影響を受けます。傍観的になれる立ち位置ならそれでもいいでしょう。しかし、イエス・キリストを知るということはそれとは違う。端的に言うならば、それは決断です。「態度決定」と言ってもよいもの。他人がどう言っているかはいいいのです。あなたはイエス・キリストとどういう関わりがあるのですか？ あなたはこの方の言葉を、今どう聞くのですか？という「迫り」が聖書にはある。今日の箇所も正にそういうところ。

7:12 には「群衆の間ではイエスのことがいろいろとささやかれていた。「良い人だ」と言う者もいれば「いや、群衆を惑わしている」と言う者もいた。しかし、ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった」とある。特にユダヤの指導者たちにとってイエスという存在は鬱陶しい存在であった。イエス様は彼らの心根(口先だけの偽善)を見抜いていたので、イエスを殺したいと思っていた。また、イエスの肉の兄弟たちも、イエスのことを霊の目ではなく、肉の目でしか見ていない。「ガリラヤからユダヤに行って、あなたのやっているわざを見せつけるがいい」と言わんばかりの態度が見える(3 節)。これは、6 章の群衆同様、イエスのわざを自分が利用する姿勢。これは認められているようであるけれども、実は向いている方向は「自分」。これは信仰ではない。

では、本当の意味での信仰とは？ それはハッキリしていると思う。イエス・キリストの招きを、自分自身の存在で聞く、応えるということ。ヨハネ福音書はイエス・キリストの招きに満ちている。6:36 もそう。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来るものは決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない」。来週以降聞く「わ

わたしは世の光である」も「わたしは良い羊飼いである」も「わたしは復活であり、命である」も皆招きの言葉。今日、イエス様は私たち一人ひとりに向かってこう言って招いている。—「**渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。**」

イエス様は、先週は「わたしを食べよ」と言われたが、今日のところでは「わたしを飲め」と言う。イエス・キリストを食べる、イエス・キリストを飲む。しかもそのことを本人が言っている。違和感を感じる言葉かもしれない。しかし、これは「わたし自身があなたの命になる！」ということ！これは途方もない愛の言葉。わたしがあなたの直中に入り、内側からあなたを生かす、ということ。

これが言われている場所はエルサレム神殿の所、時は盛大な祭りである「仮庵祭」の終わりの日。その時にイエス様は「立ち上がって大声で」言われた。ここにはイエス様の本気の招きがある。

「祭」の最後の日、それは祭りのクライマックス。一番高揚している時。我を忘れるような時。また、祭りの後の虚しさがやがてすぐやってくる時。その時にイエス様は、「渴いている人は、誰でも」と呼びかけた。人々は驚いただろう。これはある意味、その時の流れに逆らう招きではないか。多くの人々は興奮のさ中にいる。しかし、イエス・キリストは見抜いている。人間の中には、神様以外に癒すことが出来ない魂の渇きがある、ということ。

旧約聖書でも人間は“渇く者”ということはずっと語られている。詩編 42 編もそう。そして、その渇きを本当に癒してくれる方が来られるのだ、メシアはそのような存在として来ると預言もされていた。一例を挙げるとゼカリヤ書の 13:1。「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れを洗い清める一つの泉が開かれる。その日が来ると万軍の主は言われる」。この「罪と汚れを洗い清める一つの泉」が、今確かにここにあるのだ、と提示された。イエス・キリストによって。

仮庵の祭りは、また、水の祭り。イスラエルの民が出エジプト後の旅路(仮庵での旅)で水に困窮した時に、神様が岩から水を湧き出した出来事を思い起し、祭司はシロアムの池から汲む水を何度も祭壇に注ぐ。あの「水」によって我らの先祖は助けられていた。その感謝があったに違いない。その場は、大勢の人でごったがえしていた。しかしイエス様は、単に昔の想起に留まるなど、祭りの興奮と虚しさをよくご存じで、ここでこのようにおっしゃた。

『**渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖**

書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる』

人生もある意味、「祭り」と言えるかもしれない。しかし、その人という祭りが、ただ虚しさの中に消えて行かないためには、あなたには「生きた水」が必要なのだとイエス様は言う。

「生きた水が川となって流れる」とおっしゃった。「その人の内から」流れると。シロアムの池の水は、言ってみれば溜り水。イエス様は、「そんな溜り水ではなく、生きた川のように流れる水をあなた自身の中に持て」と言われた。溜り水は腐りますが、常に流れる水は清い。この水は、いつも新しく湧き出る泉のようなもの。あのサマリアの女も得たもの(ヨハネ 4 章)。この川は、私たちを絶えず潤し、癒し、また、聖める水。先のゼカリア書にあった「罪と汚れを洗い清める一つの泉」。

では、その生ける水の源流はどこにあるのか？ ヨハネ 19:34 にこうある。イエス様の十字架の場面です。「兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ水と血が流れ出た」(19:34)。私たちを癒す川は、十字架のイエスが源流。このお方は十字架でこう言われました。「わたしは渇く」(19:28)。彼は、私たちの魂の深い渇きを知っています。この方が招きます。「わがもとに來たりて飲め！」と。私たち、時にカラカラに心が渇く時があるではないですか。そういう時はどうしようもない。命が干からびてしまうような感覚になる。でも、あなたは潤される、あなた自身の中にあるものではなく、私があなたに命の水を注ぐ。これは決して涸れない泉、聖霊自身だ。私のきよい霊をあなたの内に注ぐ。それを遠慮なく受けてほしいと主イエス様は招いている。

「ジュダ・ベン・ハー」の物語。映画『ベン・ハー』。彼も心がカラカラに渇いている人だった。彼を保たせていたのは、「復讐心」だった。ローマ総督殺害の濡れぎぬを着せられ、母親と妹が殺されたと聞いた。報復をしなければ、俺は俺でないと。彼も奴隷になって苦役を強いられた。その時、倒れこんだ彼に水を差し出す手があった。それがイエス・キリストだった。この方は一体どういう人だろうと思った。

彼は、あの戦車競走である意味復讐を遂げたのですが、実は母と妹は、ひどい皮膚病(らい)に冒され、谷に捨てられるようになっていた。しかし、彼はあのイエスが十字架に架かる現場に行ってイエスの声を聴いた。「彼らを許したまえ、彼らは何をしているのかわからないです」。これにベン・ハーは心底打たれた。そして、十字架から川のように流れる血(!)が、その谷にまで流れ、母と妹は癒され、ベン・ハーと再会する。その時、ベン・ハーは言う。「私の復讐心というのは、消えてしまったよ」と。そうです、私たちに求められていることは、己を神とすることではなく、自分自身を「明け渡す」こと。イエスを主として迎える時、「もうそんな復讐心は消えた」と言わせて頂ける。聖霊によって！

ヨハネの黙示録 21:6 の言葉。―「また、わたしに言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませよう。」